

王宮の敷地の奥、人が滅多に踏み入らない深い森を抜けた先に、その塔はあ
る。

荒れ放題の木々の間をかき分けて、一人分の踏み分け道を辿っていくと、や
がて古い石造りの塔が姿を現す。私は片腕に野菜のかごを抱えながら、重厚な
扉の前に立って、いつものようにコツコツと遠慮がちにノックした。

——返事はない。

さあつと、木立が揺れる音だけが聞こえてくる。

（……やつぱり、すぐには開けてくれないか）

めげずに、二、三回同じようにドアをノックした。すると数秒の間を置いて、扉の取っ手がぼうつと淡く光り、カチャリ、とひとりでに回った。魔法で開
けてくれたらしい。

「お邪魔します……」

律儀に誰もいない空間に向かって声をかけながら中に踏み入ると、石と古い本の混ざったような香りが鼻をくすぐる。

薄暗い螺旋階段を、かごを揺らさないよう気をつけながら一段一段上っていく。窓はほとんどなく、石壁に埋め込まれた魔法石の明かりが、頼りなく足元を照らしていた。

少し息が上がつてきたとき、ようやく目の前に扉が見えた。扉を押し開けると、空気がぱつと変わる。

壁面を埋め尽くす書棚、大きな机、そして窓から差し込む午後の柔らかな光——広い円形の部屋の中央に置かれた革張りのソファに、長身の男性が一人、背もたれにだらしなくもたれかかって本を読んでいた。深いフードを目深に被っていて、顔の上半分はほとんど影に隠れている。

「……ジーク、お邪魔します」

改めて家主に声をかけると、本に落としていた視線がちらりとこちらを向いて、また戻った。

「もう入っているだろう。毎回毎回、よく懲りないものだな」

「今日はドアを開けてくれるの、いつもより早かったね」

「早く開けないと、うるさいからな」

「そんなに激しくノックしてないと思うんだけど……」

苦笑しながら、キッチンの隅のいつもの場所に野菜の入ったかごを下ろす。

両手が空いたところで、まだこちらを向こうとしないジークのそばまで歩み寄り、そのフードをそつと後ろへ落とした。

現れた琥珀色の瞳が、わずかに細められて私を見る。でもジークは、フードを被り直そうとはしなかった。

「なんだ」

「……こつちを見てくれないから」

意志の強そうな吊り上がった瞳、高い鼻梁、形のいい薄い唇、シャープな輪郭。そして何よりも――炎がゆらめくような、鮮やかで美しい真つ赤な長い髪。

（……今日も、綺麗だなあ）

じつと見てしまっていた自分に気づいて、慌てて視線を逸らした。フードを落としたのは、私なのに。

一つ咳払いをして、今日ここに来た理由を改めて思い出す。

「ねえ、ジーク。今日も魔法を教えてもらえないかな」

「……何度やつても同じだと思いがな」

ジークはようやく静かに本を閉じて、背もたれに深く身体を預けた。

「お前がこの世界に来た日から、魔法が使える兆候など、一度たりともなかっただろう」

「でも……もしかしたら、ある日突然使えるようになることだつてあるかもしれないじゃない。このままじゃ、私——」

——このままじゃ、私は本当に、どこにも居場所がなくなつてしまう。

私の名前はサウ。この国の住民ではなく、ある日突然ここに召喚された、異世界からの人間だ。

この国では、数十年に一度「聖女」が召喚される。この国の周囲には、凶暴な魔獣から民を守るための結界が張り巡らされている。その結界は時とともに弱まっていくもので、それを修復するのが聖女の役割だ。これまでは魔力に適性のある者が選ばれ、召喚されてきたはずなのに。

——私には、魔力の気配がこれっぽっちもない。

どうやらこれは緊急事態らしく、国の重臣たちは連日、私の処遇を話し合っているらしい。でも——私にとってそれは、他人事にできない切実な問題でもあ

る。

（だって、私には帰る場所がないから……）

実は元の世界で、私はトラックに轢かれて死んだ。魂が離れるその瞬間に、この世界へ連れてこられたらしい。肉体はそのときに死んでしまったはずなのに、容姿はあのときのままだった。それが不思議で以前ジークに尋ねたところ、肉体はこちらへ来る際に再構成されたのだと言う。難しい話は正直よくわからなかったけれど、要するに——元の肉体は、もうとつくにない。戻りたくても、戻る先がないのだ。

6

別に積極的に死にたかったわけではない。ただ仕事で山積みで寝不足がたたってしまい、注意力が散漫になってしまっただけだった。

でも、もう戻れないと聞かされたとき、悲しいとあまり思わなかった自分に、少しだけ驚いた。両親は幼い頃に他界して、高校を出ると同時に親戚の家を飛

び出した。寝る間も惜しんで働き続けた日々の中で、気づけば私のことを気にかけてくれる人は誰もいなくなっていた。元の世界への未練が、思っていたよりずっと薄かったのだ。

だから——この世界で生きていくしかない。聖女として、せめて何か役に立ちたい。とは思っているものの、魔力も発現しない私は王宮内でも腫れ物に触るように扱われており、どうも居心地が悪い。その結果、私はその有り余った時間でこの男のもとに通っている。

「……ねえ、ジーク。このまま私の魔力が発現しなかったら、どうなるのかな」
「どう、とは？」

「この国のこと。結界が弱まってるから、私がこの世界に召喚されたんでしょ？」

「そうだな。魔力が目覚めなければ、魔獣が結界を破り、この国を襲うだろう」

な」

平然とした答えに、この国のことは本当にどうでもいいのだろうか、と私は思った。視線が、自然と彼の赤髪に吸い寄せられる。

（こんなに、綺麗な髪なのに）

彼は、この髪色のせいで、国の人間からずいぶんひどい扱いを受けてきたらしい。以前、ぼつりと聞かせてくれたことを思い出す。それを思えば、この国への感情も無理はない——と、それ以上は考えないようにした。

「……じゃあやつぱり、魔法使えるように頑張らないとね」

弱気になりそうだった心を押し込めて、できるだけ自然に見えるように笑って見せた。ジークが少し変な顔をしていたから、あんまりうまくは笑えてなかったかもしれないけど。

「今日は水の魔法にするか」

「水の魔法！ 使えるようになったらお花の水をあげるのが楽になるね」

——とは言いながら、一度も自分では魔法を使えたことのない私は、きつと今日も彼の手元をじつと眺めることしかできないのだけど。それでも、ジークが魔法を使う様子を見るのは、それはそれで好きだった。

ジークがゆつくりと立ち上がった。長身の影が、すうつと私の上を横切る。

彼は窓辺の棚に置かれた小さな鉢植えの前に立つ。私もパタパタとその後を追いかけて、自然と横に並んだ。

彼はゆつくりと、大きな手のひらを鉢植えにかざした。

「水を、イメージする。その色、温度、重さ——自分の内側から湧き出るものを、水の形へゆつくりと変えていく。手のひらの先へ集まっていくなを感じたら——放す」

その指先から、細い水の糸がするりと流れ出た。さらさらと音を立てて、土

に柔らかに染み込んでいく。

「わぁ……………！」

（綺麗…………）

思わず息を呑んだ。窓から差し込む光を受けて、水がひとつぶ、ひとつぶ、透明に輝いている。こんな小さな鉢植えに水をやるだけで、奇跡みたいに見えるてしまうのだから不思議だ。魔法って、すごい。

隣のジークをちらりと伺うと、相変わらずの無表情で、これが当たり前だとしても言いたげにしている。確かに、強大な魔力を持つ彼にとって、この程度の水を出すことは瑣末なことなんだろう。

わずかに伏せられた長いまつ毛が、彼の目元に影を作っている。近づいて初めてわかる肌のなめらかさに、思わず目が釘付けになった。

（…………顔が、良すぎる）

いつの間にか魔法ではなく、彼自身を見つめてしまっていたことに気づいて、慌てて視線を目の前の鉢植えに戻した。

水の勢いはだんだんと弱まり、やがて静かに止まった。

「ほら、やってみる」

「……わかったわ」

見惚れていたことは、幸いジークには気づかれていないようだった。気を取り直して、先ほどのジークを真似て、植物に向かって手をかざす。

（……水。水が流れる様子をイメージするのよね）

自分の中にある魔力というものが、いまいまだ掴めない。それでも何かが身体の奥底をわずかに流れているような気がして、その細い流れを手繰り寄せるように意識を向けてみる。指先が、ほんのりと温かくなった気がした。

そして、それを放出する。当然だけど、何も起こらない。

「……はっ」

「ちょ、ちよつと。笑わないでよ」

鉢植えはなんの変化もなかった。ジークは私の微かな魔力の流れを感じ取ったのか、鼻でふつと笑う。

——そのときだった。

ジークが眉をひそめて、窓の外を見やった。私も、彼の目線を追いかけるように外を見たけれど、そこには何もいない。

もう一度彼の方を見る。遠くの何かを探るように鋭い目をした彼に、ジーク、と呼びかけた。

「静かに」

低く、短い声で告げられる。黙ってこくり、と頷くと、塔の外の遠くの方から、低く濁った唸り声が響いてきた。何かが近づいてくる気配がした。

（な、なに……？）

本能的な恐怖に、身体が勝手に固まる。心臓が早鐘を打つ。

あの声は——魔獣だ。結界の外に跋扈しているという、凶暴な。

「ここだな」

ジークが言った直後、遠くの森の方角が白く弾けた。魔法の閃光が木々のシルエットを一瞬だけ浮かび上がらせ、すぐに消えた。唸り声は、それきり聞こえなくなった。

「……え」

私は目を丸くしながら、涼しい顔をしているジークを見上げた。

「ここは結界の境界線に近いからな。低級の魔獣が入り込んだ」

「そう、なの……」

まだ心臓がバクバクと鳴っている。声を聞いただけでも恐ろしかった。そんな

恐ろしい存在を、彼はこんな遠くから一瞬で倒してしまえるのだと思うと、改めて彼の強さを思い知らされる。

（そして、私が結界を直さなければ……）

手がすうつと冷えて、ガタガタと震え始める。

「サラ」

嫌な想像に引つ張られそうになっていた私の思考が、彼の低い声に引き戻される。

「……あ、ごめんなさい。助けてくれて、ありがとう」

「たいしたことではない。それよりも、さつき持ってきたアレ、どうにかしてから帰れよ」

『アレ』と言って彼が顎先で示したのは、キッチンの方に置いてある野菜のカゴだった。言い方こそぶつきらぼうだったが、暗い考えから引き離そうとして

くれているのだとわかった。

「わかったわ、すぐに作るから待っていてね」

くるりと向きを変えて、キッチンへと向かう。もう、手の震えは止まっていた。

「ジーク、できたよ」

声をかけると、ジークはすぐに本を閉じてくれた。ソファの脇のテーブルにトレーを置く。

魔法を教えてもらうようになって何度か通ううち、私は料理を作るようになった。

あるとき、彼が何もない空中からパンを生み出すのを見て食事のことを聞いた。

たら、いつも片手で食べられるもので済ませていると言っていた。それだけじゃ絶対に栄養が偏る、と思ったのと、もともと料理は好きだったのとで、お礼も兼ねてたまに作るようになった。

最初のうちはなかなか本を閉じてくれなかったけれど、最近では料理が熱いうちに手をつけてくれるようになっていた。

ジークが口をつけたのを確認して、私もキッチンの隅に腰を落ち着け、自分の皿を手を取った。

時折食器とスプーンが鳴る音が響くだけの、静かな時間。でも、嫌じゃない沈黙だった。

「……お前の世界の人間は、毎日こんな回りくどい方法で食事を作っているのか」

「うん。だって——人の手で作った料理って、温かいでしょう」

ジークは何も言わなかった。ちらりと視線を向けると、皿はもうほとんど空になっていた。



17
また別の日、回廊を歩いていると、前方の会議室から怒声が漏れ聞こえてきた。

思わず足が止まった。盗み聞きするつもりなんてなかったけれど、ドアの隙間から漏れてくるその声の中に、聞き覚えのある単語が混じっていた。

——聖女。

（……私のこと、話してる？）

壁に背をつけるようにして、息を潜めた。

「騎士団の報告によれば、先月だけで下位の魔獣が結界付近に出た回数が倍近い。今月に入ってから増加の一途だ。結界はもはや時間の問題と考えるべきだろう」

「聖女はどうなっている。いまだ魔力の気配もないとは、どういうことだ」

怒声に怒声が混じり合い、場は荒れていた。壮年の重臣たちが口々に解決策を探る中、ひととき若い声が割り込んできた。

「他の魔法使いから魔力を直接分け与えることで、魔法の素養を引き出せる場合もあります。接触を通じた魔力の強化という手法も——」

「それで結界が直るとも言いたいのか？」

「……いえ、そこまでは。分け与えられた魔力で結界の修復が可能な高度な魔法が扱えるかどうかは、また別の話です。あくまで一つの可能性として——」

「現実的でない話に時間を割くな。もっと実効性のある手を考えろ」

（他の魔法使いから、直接魔力をもらう……）

魔法使い、という言葉に、ジークの顔が浮かんた。その時、どん、と机を叩く音がして、思考が引き戻される。

「喫緊の問題は魔獣だ。直近の対処をどうする。あの……赤髪に——」

「あんな不吉な者を頼るなど、もつてのほかだ！」

別の声が遮った。今度は怒りを滲ませた、低い声だった。

「王宮筆頭魔導師などと肩書きこそ与えておりますが、あれは罪人です。誰も手が出せないために、やむなく塔へ追いやってただけのこと。今更、我々が頭を下げるというのですか」

「そもそもあの赤髪からして不吉だ。生まれながらの不吉の象徴を、王宮に招き入れるつもりか」

「規格外の魔力などと言えば聞こえはいいが、要するに制御できん代物だという

ことだろう。暴走でもされてみる、結界どころではなくなりますぞ」

「有事の切り札として塔に置いているのは、いざとなれば使えるからだ。今ここで恩を売られる筋合いはない」

「おっしゃる通りです。今は別の手を探しましょう」

（……ジークが、何をしたって言うの）

ぎゅつと、拳を握り締めた。

王宮筆頭魔導師——その肩書きのことは、ジーク本人から聞いたことがあった。名ばかりのものだと、彼は鼻で笑っていたけれど。今の話を聞いて、ようやくその意味がわかった気がした。

さっきの重臣は、ジークのことを『罪人』と呼んだ。けれどそれだって、あの美しい赤い髪が不吉だから、規格外すぎる魔力が厄介だから——それだけの理由で難癖同然の罪をでっちあげて、森の奥の塔へ押し込めたに過ぎない。殺

せないから、手放せないから、そんな理由で切り札として置いているのだ。

（そんなの……）

なんだか、悔しかった。この前だって、塔の近くに現れた魔獣を倒してくれたのに。

これ以上彼を悪く言う声を聞きたくなくて、私は音を立てないように、その場からそつと遠ざかった。

（それにしても、そんな方法があるなんて、ジークは一言も言っていなかったじゃない）

重臣たちの声を反芻しながら、塔へ向かう踏み分け道を歩いていた。

魔法使いと直接触れ合うことで、一時的に魔力を分け与えてもらえる——そ

んな方法があるらしい。もしかしたら、私も魔法が使えるようになるかもしれない。

重臣たちはその話を一蹴していたけれど、少しでも可能性があるのならやってみたいと思った。

いつものようにコツコツと扉をノックすると、しばらくして取っ手がぼうつと光り、ひとりでに開く。

螺旋階段を上り、部屋の扉を押し開けると——今日のジークは、大きな机の前に座っていた。魔法陣の描かれた羊皮紙を何枚も広げて、指先でその細部をなぞるように確認している。

「ねえ、ジーク！」

「……なんだ、今日は一段と騒々しいな」

長い指が動きを止め、琥珀色の目がこちらへ向く。面倒くさそうな光が宿つ

ているのはいつも通りだ。私はその視線には気づかないふりをして、椅子に座る彼の真横まで歩み寄った。

「聞いたわ。もしかして——私でも魔法を使える方法があるんじゃないの？」

ジークの片眉がぴくりと動いた。そして、何かを測るように私の目をじっと見つめた。その圧倒されるような眼差しに目を逸らしたくなっただけど、ぐつと堪えて見つめ返す。すると彼は負けたというように、大きなため息を吐き出した。

「……誰かから聞いたのか」

「やっぱり知ってたのね。こんなに魔法が使いたいって言ってるのに、どうして教えてくれなかったの」

ジークは何か言いかけたように口を開いて——そのまま、閉じた。

視線が一瞬、どこか遠いところへ流れる。何を考えているのかはわからない

けれど、やがて小さく息をついたかと思うと、何かを振り切るように視線が戻ってきた。

「……わかった」

短くそう言うのと、私へ向かって手を差し出した。

心臓が、跳ねる。

いつも魔法を教えてくれるその手が、今は私に向かっている。長くて、骨張っていて——改めて目にするのと、ずいぶんと大きな、男性の手だ。

「魔力、くれるの……？」

「そう言っている。ほら、触れないと魔力は流せないぞ」

「……わ、わかってるわ」

（思ったより、緊張するかも……）

他の魔法使いと触れ合う、そうすれば魔法を使えるかとは思ったけれど、

それが具体的にどんな行為になるのか、全く想像してなかった自分に気づく。

彼の手に、自分の手を重ね合わせるだけだ。それに深い意味はないはず。頭ではわかってはいるけれど、じわじわと耳の先まで熱くなつていくのを止められなかった。

手が、私の方へゆつくりと伸びてくる。早くしろ、ということだろう。反射的に、半歩下がってしまう。

「魔法、使いたいんだろう？」

その言葉に、はっと気持ちが引き戻される。そうだ、これは魔力を流してもらうための——それだけのことだ。

(……えいっ)

勢いのまま、彼の手のひらに自分の手のひらを合わせる。次の瞬間、ぎゅつと握り込まれた。

「……!?」

「……いいから、そのまま」

心臓がうるさいくらい高鳴っている。このドキドキが、手を通して伝わってしまわないだろうか。いや、どうせ耳まで真っ赤になっっているだろうから、今さらかもしれないけれど。

（……手、大きい。私の手なんて、すっぽり包めちゃうんだ）

皮膚も、硬くて分厚い。柔らかい私の手とは、全然違う。こうして触れてみると、余計に男の人の手であることを意識してしまう。

（……う、手熱くなってきた。手汗かいてたらどうしよう）

触れているところから、じわじわと熱が広がってくる。触れられているのは手だけのはずなのに、まるで全身が包まれていくような――。

（あ、もしかしてこれが……?）

「手のひらに伝わってくるだろう。これが俺の魔力だ」

「……これが、ジークの」

手のひらからじんわりと全身へ溶け込んでいく熱に、鼓動がまた跳ね上がる。今のドキドキが魔力のせいなのか、それとも別の理由なのか、自分でも判別がつかなくなってきた。頭の先からつま先まで、ぽかぽかと温かい。

ジークは私の左手はぎゅつと握ったまま、右手だけをそつと離れた。

「今なら簡単なものなら使えるだろう。俺と同じようにやつてみろ」

彼が手のひらを上に向けると、指先から優しい光の粒がそつとこぼれ出す。この光魔法は、前に教えてもらったことがある。

「……わかった」

深呼吸を一つして、以前教えてもらったことを思い出す。

体の中を巡る温かな流れを、右手へゆつくりと集めていく。この熱が形を持つ

としたら、きつとこんな光になるはずだ——そうイメージして、放す。

——ぽうつ、と。

手のひらから、綿毛が舞うような淡い光が溢れ出した。

(……できたっ！)

「ジーク！ 私、できたわ……！」

「ああ、よくやったな」

嬉しくて、繋いだままの左手をぎゅつと握り込んでしまった。自分でも気づかないくらい自然に、笑顔がこぼれていた。

ほんの小さな一歩かもしれない。でも——私にも、何かできることがあるのかも知れない。そう思ったら、胸の奥が温かくなった。

ふと、ジークの目が私の顔に止まっているのに気づく。いつも静かな琥珀色の目が、どこか動きを忘れたように、じつとこちらを見ていた。

(……子どもみたいにはしゃいじゃった)

「ご、ごめんね。はしやぎすぎた」

慌てて、繋いだままだった左手を離そうとしたけれど、離れない。それどころか、かえって強く手を引かれてしまう。

「サラ」

「え、きやつ——」

体勢を崩して、座る彼の膝に乗り上げる形になってしまう。慌てて離れようとすると、腰をすつと引き寄せられて、体同士が密着した。

「……!？」

体の中は彼の魔力で満たされているのに、外側まで彼に包まれている。この状況に、頭がついていかない。

目の前に、端正な顔と艶やかな赤い髪が広がる。この身体の熱さが、彼にも

らった魔力のせいなのか、それとも彼に触れられているせいなのか——もうわからなかった。

「もつと多くの魔力を分け与える方法があるんだが、あいつらはそこまで話していたか？」

「え、つと……」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

薄く笑ったジークが、私の髪をそつと耳にかける。耳にわずかに指先が触れた瞬間、ちりつとした痺れが走る。

顔が、近い。吐息が触れそうな距離で、ジークは続ける。

「触れている面積が大きいほど、流れる魔力も多くなる。それに——やり取りするものも、多い方がいい」

「え……？ んむッ♡ ……♡♡♡♡♡」

不意に顎を掴まれて上を向かされたかと思つたら、間髪入れずに熱い唇が重ねられた。

（こ、これ……!?）

一瞬、何が起きたのか頭が追いつかない。少し遅れて、キスされているのだと気づいた。

（ジークの唇……。薄くて、柔らかい。それに、熱くて……。……つて、そうじゃなくて!）

触れ合う唇から伝わる甘やかな感触に持つていかれそうになった意識を、無理やりに引き戻す。

離れようと身じろぎした気配を感じ取ったのか、その微かな動きを察知したジークの手が、私の後頭部をぐつと押さえつけて引き寄せた。

さらに深く重なった唇の隙間から、ぬるりとした熱い何かが口内に入り込ん

できた。

「……ッ!? んんゝゝ……ッ♡ ん、ふッ♡ ちゅ、くちゅ……ッ♡」

遠慮を知らない男の分厚い舌が、私の口内を蹂躪する。後ろから頭を押さえられてゐるせいで、逃げたくても逃げられない。

唇の隙間から、お互いの唾液が絡み合う、くちゅ♡ くちゅッ♡ といういやらしい音が室内に響き渡る。

（どうしてキスなんか……ッ♡ でも、ジークとのキス、気持ちがよくて……♡ 力抜けてきちゃう……♡）

すべての感覚が、舌を絡め合わせてゐる唇に集まっていくな。彼の舌が縦横無尽に私の口内を動き回るたびに、そこから甘くて熱い不思議な感覚が、ドクドク♡ と体内に流れ込んでくる。

「ん……ッ♡ ちゅ、んう……ッ♡ んむッ、ふ……ッ♡ んう♡」

自分の鼻から漏れる吐息が、恥ずかしいくらい甘い声になっていることにも気づけない。私はただ、その熱く甘い『何か』を貪るのに夢中になってしまっていた。

ジークが私の舌をちゅうッ♡と吸い上げて、その強烈な刺激に頭がくらくらする。だけど同時に、こうすればもつと彼の唾液を、彼の中にある熱いものを引き出せるんだと本能的に理解して、私も一生懸命に彼の舌へと縋りついた。

ちゆるッ♡ ちゆるッ♡ と彼の分厚い舌を一生懸命に吸って、熱くて甘い唾液を夢中で飲み下していく。そうすると身体がもつと熱くなって、また欲しくなる。際限がない。

「ん……ッ♡ ちゆる……ッ♡ ちゅうッ♡ は、あ……ッ♡」

さすがに息が苦しくなってきた、唇を離れた。

身体はひどいくらいに熱く火照っている。キスの苦しさと身体の熱さを逃すよ

うに、はあはあ♡ と荒い呼吸を繰り返すことしかできない。

「生娘みたいな反応をしておきながら随分と上手いじゃないか。どうだ？ 口腔から直接、魔力を注ぎ込まれる気分は」

「……へ？♡」

酸欠でろくに頭も回らなかった。魔力、口から直接……。

「これ、が……♡」

お腹の奥でじくじくと疼き、暴れている熱い何かの正体は、どうやら彼の魔力らしい。

確かに言われてみれば、全身に先ほど手を触れ合わせたときよりも強烈な、ジークそのものの荒々しい気配を感じる。だけど、その純度の高い魔力はあまりにも強大で、私の身体の中で暴れ回り、快感と同時に息が詰まるような苦しさをすらあつた。

「……このまま後ろを向け」

「え？ きゃッ」

彼の膝の上で、くると強引に向きを変えさせられる。後ろからすっぽりと体ごと包み込まれるような形になり、密着した背中から伝わる男性の体温に、先ほどとは違う意味で心臓がドキドキと跳ね上がった。

「……くつ、耳まで真つ赤だな」

「ひゃ……、あ♡」

耳に彼の低い声がじかに響く。その熱い吐息にぞくぞく♡ と背筋を戦慄かせていると、耳朵に彼の齒が甘く触れた。

「あうッ♡」

不意打ちだったその感覚に、思わず身体がびくッ♡ と跳ねた。ジークは面白おもちゃでも見つけたように、喉の奥で低く楽しそうに笑った。

そのまま耳の穴に向けて、ふー……ッ♡ と息を吹きかけられる。それだけでも全身の力が抜けてしまいそうなのに、今度は彼の熱い舌が耳たぶへと触れ、その輪郭を愛おしむように舌尖でねつとりとなぞり上げてきた。

れろ……♡ れろお……♡ れろ……♡

「あ♡ それッ♡ や、だあッ♡」

「嫌がつてる奴の反応じゃないだろう。耳だけでそんなエロい声出して」

「……ッ!?♡ 言わないでえッ♡ ……あんッ♡」

恥ずかしいことをことごとく指摘されるのは堪らなかったけれど、自分のものとは思えないほど蕩けた声を抑えることができない。ジークの声そのものもまた耳の奥へ甘く響いて、全身をひどく痺れさせていく。

感覚の集まった下腹部がじくじく♡ と熱く昂る。身体を震わせるたびにキュウッ♡ と奥が締め付けられて、とろとろ♡ とした蜜が下着へと染み込ん

でいった。

その感覚に思わず膝を擦り合わせると、ジークの手が私の膝の裏側へと滑り込んできて、片方の脚を大きく横へと開かせた。

「……や、あッ♡」

着ていたスカートが自然とまくれあがって、パンツが丸見えになってしまう。クロッチ部分は、溢れ出した水分を吸ってすっかりと色が変わってしまっていた。

ジークはその逞しい腕で私の脚を固定したまま、大きな指先を下着のクロッチ部分へと這わせた。

「あ、う……♡」

「すごいな。キスして、少し耳を舐めたただけだぞ。……もうこんなに濡らして、いやらしい女だな」

彼の太い指が、溢れる蜜を確かめるように濡ればそつた布地を上下になぞる。そのたびににっちゅ♡ にっちゅ♡ と粘着質な水音が響き渡った。

「やだ、やだ♡ 恥ずかしいからあ……♡」

「なぜだ？ こんなに可愛いのに」

「ん♡ ……えッ？」

（……可愛いって言った？ あのジークが、私に？）

いつも不遜で、どこか感情の読めない彼から飛び出した思いがけない言葉に、言葉にならない甘い喜びが胸の奥に湧き上がる。

——ピン♡

「あ……!?♡ ……♡」

けれど、そんな甘い気持ちに浸る余裕さえ与えられないほど、新たな快楽が脳天を突き抜けていく。ジークの爪先が、下着越しにぶっくり♡ と硬く尖つ

た秘豆を弾いたのだ。

「クリトリス勃起させすぎだろ。もうこんなにでかくして……、下着の上からでもどこにあるかまるわかりだ」

ピンッ♡ ピンッ♡ ピン……ッ♡

「あッ♡ や、あッ!!♡ んお……ッ♡」

裏筋から芯を正確に捉えられ、リズムカルに刺激されるたびに身体が細かく跳ね上がる。

そのたびに、愛液がとろッ♡ とろッ♡ と溢れ出して、もはや布地では吸い切れなくなつた蜜が、彼のズボンへと滴っていく。

（あ……ッ♡ 汚しちゃう……ッ♡）

咄嗟に身じろぎしようとしたそのとき、自分の尾てい骨のあたりに、何やら硬くて熱い質量が押し当てられていることによりやく気がついた。

(え、これ……ッ♡)

それが彼の屹立だと理解した瞬間、魔力が熱くわだかまった下腹部がきゅうッ♡ と切なく戦慄いた。ソレが欲しいという強烈な欲求とともに、きゅッ♡ と締まった膣から、また蜜を溢れさせてしまう。

「はっ、もう濡れすぎてて下着の意味がないな。……邪魔だから脱がせてしま
うぞ」

「……あッ♡」

(そ、それは……♡ さすがに、それ以上は……!♡)

心の中でそう思ったけど、抵抗する暇なんてなかった。

彼の手が下着のゴムにかけられたと思ったら、次の瞬間にはずりりと脱がされていた。

パンツはやっぱりびしょびしょ♡ で、肌から離れていく瞬間に、と

ろお……ッ♡ と粘り気のある糸が、名残惜しそうに長く伸びていった。

ジークの長い指先が、ぬらぬらと光った私のおまんこに伸びていく。私はなぜか、その様子をただ眺めることしかできない。

「あ、う……♡」

会陰を伝ってお尻の方へとろり♡ とこぼれ落ちていく熱い蜜が人差し指で掬い上げられる。そのまま、ぷっくり♡ と膨らんだ秘豆の周囲を、円を描くように優しく優しく、指の腹で撫で回されてしまう。

「あ！♡ ああ……ッ♡ ん、うう……ッ♡」

触れるか触れないかくらいの優しいタッチで撫でられているだけのはずなのに、剥き出しのクリトリスにじかに与えられる刺激は、布越しに触られていたのとは桁違いの鮮烈さで、脳の芯が痺れていく。

くる……ッ♡ くる……♡ くるくる……ッ♡

（うゝゝ……♡ クリトリス撫でられると頭おかしくなりそう……♡ ナカ
 がぎゅー♡ つて締まって、奥からどんどん溢れてくる……♡）
 「ジーク、♡ それ♡、やだあ……♡ ぞくぞくつてなつて……♡、へんに
 なる♡」

「お前はさつきからやだやだばかりだな。こんな刺激じゃ物足りないか？」

——ぎゅむ♡♡♡

「んお♡」

奥の芯を捉えて、親指と人差し指の腹で摘み上げられた。直接的な鋭い快感が脳天を突き抜けて、ひどい声が漏れた。

「最初だから優しくしてやろうと思ったんだが。お前がもつと激しいのがお好みならそうしてやるしかないな？」

「……………♡♡♡♡♡ ツ♡!!♡ あ——……♡♡♡ んお、おゝゝ……♡♡!!♡」

まるでおちんちんを抜くみたいに、指先で肉芽の芯を上下に揺すられる。そのたびに皮がめくれたり、戻ったりして、中から真っ赤に勃起したピンクの真珠が見えたり隠れたりを繰り返した。

（違うのにい……ッ♡ クリちゃんシコシコされると……♡ おかしくなるッ!!♡）

あまりにも激しい快楽に、息が詰まる。否定の言葉が、声にならない嬌声に溶けていく。

シコシコシコ……ッ♡ ぬっちゅッ♡ ぬっちゅッ♡ ぬっちゅッ♡

「あ、あぁ……ッ!♡♡ これ、えッ♡♡ やらッ♡♡ くるうッ、なんかきぢやうッ♡♡」

下腹部がひどく熱くなって、何かが弾けてしまいそうだった。反射的に、クリを抜く彼の腕を押さえようと手を伸ばした。

「こら」

「おうッ♡」

たしなめるような低い声とともに、耳にかりッ♡ と齒が立てられて、身体が震えた。力が抜けて、彼の腕から手を離すしかなかった。

「腹の奥、だいぶ俺の魔力が溜まって苦しいんじゃないか？ 絶頂することで魔力が馴染んでいくから……。ほら、我慢するな♡」

「なッ、なにそれ……ッ♡ あッ♡ そんなの、聞いてな……。ああッ♡」

触れ合うことで魔力が使えるようになる、ただそれだけの話じゃなかったんだろうか。重臣たちがこの話を一蹴したのはそういう事情もあったのかもしれない、と溶けていく思考の片隅で思った。

（ああ……ッ♡ このまま続けられたらッ♡ くるッ、くるッ♡ すごいの、くる……♡）

「おッ♡——♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ビクッ♡
ビクビクビクッ♡♡
ビクンッ♡♡

足の指先をぎゅっと丸めながら、全身を痙攣させる。お腹の奥に溜まっていた熱いものが、ドクンッ♡ ドクンッ♡ と弾けて、全身を内側から甘く灼き尽くしていく。

「……………ツツ♡♡は、あ………ツ♡」

（イ、イかされちゃった……♡ ジークに……♡ 頭が沸騰しそうなくらい熱い……♡ でも、お腹の奥が……♡ もっと、もっとって疼いてる……♡ ツ♡）

「は……ッ
じーく……」

身体の中の熱を持て余したまま、後ろにいるジークを振り返ると、熱く潤んだ琥珀色の瞳と視線がぶつかった。すぐに顎をぐつと持ち上げられて、奪うように唇が重ねられる。

「んむッ♡」

二回目の口付けは、一回目よりもさらに遠慮がなかった。

合わさった唇の隙間から、すぐに熱い舌がこちらの口内へと滑り込んでくる。そのひりつくような温もりに誘われるように、私も蕩けた頭のまま自分から舌を差し出して、彼の舌へと絡みつかせた。

（あっつい……♡ あっつい……♡ 唇、きもちいい……、もつとほしい……♡）

自分のものとは思えないような淫らな欲望に突き動かされるまま、彼の舌を味わうことに夢中になつてしまう。彼から熱いものがひっきりなしに流れ込んできて、さつき達したばかりのはずの身体がまたみるみるうちに甘い熱に侵食されていくのがわかった。

「ん……ッ♡ ちゅ、くちゅ……ッ♡ ん、ふ……ッ♡ ——……んんッ!？」

♡

—ぬふ……ッ♡

キスに夢中になっていると、彼の太い指が膣に沈んでいった。たつぷりと濡れぼそつていたナカは少しも抵抗することなく、むしろそれを待ち望んでいたかのように彼の指を飲み込んでいく。

「あ……ッ!?♡　じ、じーくう……!♡　それ、は……あッ♡」

「指一本でこれか。狭いな……。ほら、もつと力抜け。奥まで入らないぞ」

「ちよ……ッ、あ♡　んん……ッ♡　ちゅ……、ん、ふう……ッ♡」

思わず身体をこわばらせてしまった私を宥めるかのように、再び唇が重ねられた。舌を絡め合ってる間にも、彼の指がぬふ……ッ♡　ぬふ……ッ♡　と奥へ入り込んでくる。

（ジークの指、太い……ッ♡）

ちらりと真下を覗くと、彼の長い指が私の秘部に埋まっているのが見えてしまった。ついさっきまで手を重ね合わせるだけであんなに緊張して、大きいなと思っていた手が、私のナカを犯そうとしている。その事実には、恥ずかしさのあまり心臓が破裂しそうになる。

膣襞を一つずつ確かめるように入っていた指が、やがて最奥の行き止まりに突き当たった。

——トンッ♡

「んおッ!?!♡」

指の腹で、奥のこりこりとした敏感なところを突かれた瞬間、一瞬呼吸が止まった。

身体中の毛穴からぶわっと汗が吹き出す。お腹に溜まっていたジークの魔力が、その衝撃で一気に全身へ向けて暴れ出し、激しく駆け巡り始める。

「ん、あー……？　ちよつと魔力を注ぎ込みすぎたか。器が優秀とはいえ、これ以上は少しやりすぎかもしれないな」

ジークはナカに指を埋めたまま、耳元で低く声を漏らした。

「俺の魔力は強すぎるからな。一気に注げばお前自身に影響が出かねない。少しずつ俺の存在を馴染ませていく必要がある。今日はここまでだな」

（こ……ッ♡　こんなに身体が熱くてつらいのに……ッ？♡）

その言葉に、このまま終わってしまうんじゃないかと思つて、膺内の彼の指を離さないように無意識のうちにぎゅうッ♡　と締め上げてしまう。私の反応に、後ろのジークがくつと喉の奥で笑う気配がした。

「随分と物欲しそうだな？」

「あう……ッ♡」

耳元で低く囁かれて、身体が小さく跳ねた。そう言われるのは恥ずかしかつ

たけれど、だけど私は確かに今、ジークにこのお腹の奥の疼きをどうにかして欲しくてたまらなかった。

「心配しなくてもこのままイかせてやるさ。このままじゃ腹の奥がっらいだろう」

（じゃあ、『今日は』っていうのは――）

どういう意味だろう、と甘やかな予感に胸を熱く震わせたとき。

——トンッ♡ トントントッ♡

「お——……ッ!?!♡ しょこ、お!!♡ んおッ!!♡♡ しょこッ♡ しゅこい
 いいいいッ♡♡」

奥のこりこりとしたところを、指の腹で圧をかけるように突かれる。お腹の奥に直接響くような刺激に、それ以上何も考えられなくなってしまう。

おまんこがぎゅうッ♡ ギゅうッ♡ どうねって、もつと奥まで突いて♡

とおねだりするように、勝手に彼の指を締め上げてしまう。

呼吸が浅くなつて、下腹がひくつく。はっはっ♡ とワンちゃんみたいな短い呼吸を繰り返しながら、私は与えられる過剰な快楽を必死で受け止めていた。

「……サウ、これが俺の魔力だ。よく覚えておけよ」

「え？♡ ……んむッ♡ んん~~~~~………ッ♡♡」

再び重ねられた唇から、今までの比ではない巨大な奔流が流れ込んできた。その巨大な何かに、ただただ呑み込まれていく。身体が、熱くてたまらない。

（あつい……ッ♡ あついよおお……ッ♡♡♡）

全身の血液が一瞬で沸騰したみたいに熱くなり、鼓動が激しく跳ね上がる。心臓が壊れてしまうんじゃないかと思うくらいの強い衝撃が胸を叩いた。

——ぐりい……ッ♡♡

ぬっちゅッぬっちゅッ♡♡ トン、トントントン……ッ♡♡

さらに、さっきみたいにクリトリスを二本の指で挟み込まれてぐりぐりと潰されながら、ナカの指で子宮口をリズミカルに突かれる。

「……………ッッッ♡♡ あ♡ あ、あ……………ッ♡♡」

——こんなの、耐えられない。

かろうじて自分を抱き締める彼の腕に縋りつき、頭を大きく後ろにのけぞらせた。

ジークの胸元に後頭部が深く沈み込み、彼の熱い吐息が耳元を掠めた。全身が小刻みにガクガク♡ と痙攣し、肉体が限界だと悲鳴を上げる。

視界の裏側で激しく火花が散り、もう何かなんだかわからないくらい、圧倒的な気持ちよさだけで頭の中が真っ白に埋め尽くされていった。

「このままイケ♡ 俺の魔力を覚えて……、身体に染み込ませるんだぞ」

「お♡ あ……ッ!!♡ イック♡ イクッ♡ あ、くく………ッ♡♡」
 ビクビクビクッ♡♡ ふしゃあああああッ♡♡ プシ……ッ♡♡ ビ
 ク……ッ♡♡

（からだ……、あつつくて……♡ でちやつた……♡ ぜんぶでちやつ
 たあ……♡）

そつと目を閉じると、彼の荒く熱い呼吸と、ドクン♡ ドクン♡ と鳴り響く自分の大きな心臓の音だけが聞こえてくる。

身体の中を巡る温かいエネルギーに身体が作り替えられていくような、不思議な感覚がした。でも、それは決して不快なものじゃなくて、むしろ大いなるものに丸ごと守られているような、この上ない安心感だった。

疲れ果てた身体でその余韻をそつと追っているうちに、次第に意識が心地よく霧散していく。

「サラ……」

私を呼ぶ、いつもは不遜な彼からは想像もつかないほど、ひどく優しくて熱を持った声。

それと同時に、こめかみに柔らかな唇がそつと触れたような気配がしたけれど――それが何かを確かめる前に、私の意識は深い眠りのなかへと、ゆっくり溶けていった。



「は、あ……ッ　　♡　　ん、ふ……ッ　　♡　　」

自室のベッドの上で一人、私はどうしても処理しきれない熱を持て余していた。

(ジーク……ッ♡)

下着を脱ぎ捨てて横たわり、恥ずかしさも忘れて足を広げ、あの日彼にされた指の動きを思い出す。クリトリスを親指と人差し指で挟むようにして、上下にそつと扱いてみた。

だけど、自分の小さくて細い指では、あのときのような快感は得られない。あの大きくて太い指で触つて欲しくて仕方なかった。

「う、……あッ♡ ん、はあ……ッ♡ んう……♡」

彼に触れたあの日以降、私の身体はおかしくなってしまったみたいだった。時折、身体が熱暴走を起こしたみたいにかつと熱くなつて、下腹部が疼いてたまらなくなる。

ジークとは、あの日以来まだ一度も会っていない。あんなに恥ずかしいことをされてしまったから、なんだか顔を合わせるのが気まずかったのだ。だから

この数日間、私は彼のことばかりを思い出しながら、こうして一人で寂しく身体を慰めている。

だけど、身体の熱は一向に収まる気配がなく、それどころか日を追うごとにひどくなっているような気がする。

しきりに蜜を吐き出し続けるおまんこを慰めるように、今度は膣へと指を差し入れてみる。

（う……♡ 自分の指じゃ……♡）

どうやってもいちばん奥まで届かない。あの日触れてくれた膣の底を、もつともつと奥の深い場所を、彼の指で突いてほしいのに。頭の中が、あの美しい赤髪の男性の姿でいっぱいになる。

（あー……♡ ジークに触ってほしい……♡ たくさんキスして、クリちゃん扱ってもらって……♡ オトントンッ♡ つていじめてほしい……♡）

「ん、う……ッ♡ せつない……♡ せつないよお……♡」

自分でいくら頑張っても気持ちよくならないもどかしさと、何をやっても埋まらない切ない渴きに、生理的な涙がぽろぽろと頬を伝っていく。

——ジークが、恋しい。

「う、あ……♡ ——……ッ!♡」

彼の顔を強く頭に思い浮かべた瞬間、身体がピク……ッ♡ と小さく震えた。ようやく訪れたささやかな絶頂に、大きく息を吐き出してシーツに突っ伏した。

「……はあ。ダメだ、頭がぼーつとする……」

いつまでも狭い部屋に閉じこもっていても、余計に変な妄想ばかりが膨らんでしまう。

（少し外の空気でも吸って、頭冷やしてこよう……）

肌についた汗を簡単に拭き取り、手早く身支度を整えてから、私は逃げるように部屋を後にした。

人気がない庭園のベンチに腰を下ろす。手入れの行き届いた花壇が左右に広がり、その向こうでは小さな噴水がひっそりと水音を立てている。ジークと出会う前——王宮に居づらかった私が、よく足を向けた場所だ。

咲き乱れる花々を眺めても、気持ち少しも晴れない。赤い花びらに目が留まるたびに、あの人の美しい髪が頭に浮かんでしまう。

（ジーク……）

彼に魔法を教えてもらう日々は、楽しかった。

元の世界で、どこにも居場所がなかった私。この世界に召喚されて、こんな

私にも何かできることがあるかもしれないと思った。だけど現実はどううまくいかなくて——私はなんの魔力も持っていないかった。

この世界でも、私は必要とされない。

そんな中で、彼という時間こそが、私の救いになっていた。

本当は、魔法を本気で教わる気なんてなかったのかもしれない。彼の大きな手から生み出される奇跡みたいな魔法を、ただ見ていたかった。あの美しい赤い髪を、低くてやわらかな声を、ぶっきらぼうだけど不思議と優しい言葉を——ずっと傍で感じていたかった。

——私は、少なからず彼に惹かれていた。

(……でも)

どうして彼が私にあんなことをしたのか——それは私に魔力を注ぐために他ならない。それだけのために、躊躇なく私に触れられる。

愛されているなんて、最初から思っ
てはいなかった。

——だけど。

誰とも関わらない彼が、私には魔法を教えてくれた。私が作ったご飯を、黙って全部食べてくれた。そういう小さなことが積み重なるたびに、気づかないふりをしながら、でも心のどこかでずっと関係が積み上がっていったのだと勘違いしていた。いつの間にか、彼にとつて特別なのかもしれないと——そう思い込んでしまっていた。

それが、全部ただの思い違いだったと、改めて思い知らされた。だけど、やっぱりそうなんだと突きつけられると、胸が痛かった。

（だけど、私は——）

身体の奥で、まだジークの魔力が渦巻いているのがわかる。熱を持った何か
が指先から胸の奥まで行き渡って、どうにも落ち着かない。

（会いたい）

素直にそう思ってしまう自分が嫌だった。あの日だって、目が覚めたら横に彼が寝ていて、それなのに何も言えないまま塔を出てきてしまった。

「……会う勇氣もないくせにね」

自分でつぶやいて、情けなくなる。どんな顔して彼に会えばいいのかわからなかった。あれは魔力のためで、ジークは私のことを——そう考えるたびに胸が痛くなって、でも身体はまだあの熱を覚えていて。

（ジークはあのととき、『今日は』ここまでにするって言ってた）

そのときは夢中でうまく考えられなかったけど、私はうつすらと気づいてしまっている。身体を触れ合わせることで魔力を受け取れるなら、きつと、より強力な魔力を受け渡す方法は——。

（……えつちする、つてことだよね）

そこまで考えたところで、下腹部がきゅううツ♡ と浅ましく疼いた。

「な、何を考えてるの、私……！」

頭を振って、空を見上げる。意識を別のどこかに向けようとした。そのときだった。

遠く、空の一角が——パキイン、と高い音を立てた。

「…………え」

一瞬、世界が静止した気がした。

空の端、結界のあたりが、うつすらと光のひびを走らせている。それはすぐに消えたけれど、確かに見えた。

（……ひびが、入った）

心臓が嫌な音を立てた。

結界が壊れるのは時間の問題だ、と言っていた重臣たちの声が脳裏によみが

える。言葉でその重要性は知っていたはずなのに、こうして実際に目にする
と、私が背負っているものの重みがのしかかってくる。

気づけば、手が動いていた。

自分でもよくわからなかった。この状況をなんとかしたかったのかもしれない
し、単純に心細くて、身体の中に未だにわだかまるジークの魔力を通じて、彼
との繋がりを感じたかったのかもしれない。

手のひらを虚空にかざした。身体の奥底にわだかまっている熱を、静かに手
繰り寄せる。ジークのあたたかな魔力を、しっかりと感じる。すると――。

――ふわり、と。

手のひらから、光の粒がふわりと溢れた。

「……できた」

綺麗だと思った。小さな、本当に小さな光だったけれど。見つめているうち

に、不安だった心がじわりと温かくなった。その光を、静かに眺めていた——
そのときだった。

「サラ殿……ッ!?」

「え……っ?」

突然の声に、全身がびくつと跳ねた。

振り返ると、回廊の方から数人の人影が早足で歩いてくるところだった。先頭は見覚えのある重臣で、その後ろには騎士団の者らしき剣を携えた人間が数人続いている。重臣は私を見つけて目を剥き——その場にぴたりと立ち止まった。隣の騎士は気づかず、耳元への報告を続けている。

「報告によれば先ほどの亀裂は一時的なものかと思われませんが、念のため

——」

「おお……おお、おお!」

重臣が不意に駆け出した。「大臣殿、お待ちを!」と騎士の声が後を追ったけれど、もはや耳に入っていないようだった。

「わしは信じておりましたぞ! やはり我らの聖女よ、ついに発現なさったのですな! なんと素晴らしい!」

「え、あ……」

(……この人、前にお会いした方、だよね?)

大げさなほど深々と頭を下げるその人物は、魔力が使えないとわかったあの日、冷たく値踏みするような目でこちらを見ていた同じ人物とは、到底結びつかなかった。

「何故もつと早くお知らせくださらなかったのですか、このような朗報を! 人が悪うございますぞ!」

重臣はぱつと頭を上げると、私が言葉を挟む隙もないまま、その太い手で私

の手を取った。

「あ——」

（いやだ）

咄嗟に思ったけれど、引き剥がすことはできなかった。目上の人だ。そう思つてぐつと堪えたけれど、べたついた手の感触に、背筋がぞわりとして鳥肌が立つ。ジークに触れられたときは、全く違う。

「やはり、大臣閣下のご慧眼でございました！」

追いついてきた騎士の一人が、重臣に向かって声を張り上げた。

「この娘の可能性を信じてお置きになつていたからこそ！ さすがでございませう！」

他の数人も追いついて、口々に重臣を持て囃す。私の話をしているはずなのに、誰一人として、私の方は向いていない。

重臣は私の手を離して、まんざらでもなさそうにニヤリと笑った後、後ろの騎士たちに向き直った。

「あー、先ほどの亀裂の件だが——国民どもが騒ぎ出す前に手を打て。わけもわからず王宮に押しかけてきたら面倒だからな。問題はないと触れ回れ。低級の魔獣もまた出たかもしれん、念のため騎士団総動員で見回りするように」
彼らの会話を聞きながら、心のどこかにざらざらとしたものを感じる。

（……国民が心配だから、じゃないんだ）

「承知いたしました！」「ただちに」と、騎士たちがそれぞれ頭を下げて散っていく。重臣は踵を返しながら、思い出したようにこちらを振り向いた。

「おお、そうだった。サラ殿、では改めてご予定を——後ほど伺いますぞ！」

「あ……はい」

返事をしたかどうかも定かではないうちに、重臣たちはもうせかせかと遠ざ

かっていた。あつという間に消えていく背中を、私はただ見送る。光の粒はとつくに消えていた。



私は足取り重く、森の中を歩いていた。

（あの重臣たち……）

先ほどまで開かれていた会議の様子が、頭にこびりついて離れない。

私が魔力を使えるようになったと知った彼らの変わりようは、目を疑うほどだった。これまでは魔力がない私のことを厄介者扱いして、「召喚に失敗した」「なぜこの娘なのか」と、私に聞こえるように散々揶揄してきたのに。

あのときの彼らの言葉を思い出す。

「これで結界も修復できましょう！ 我が国はますます安泰でございますな」

「しかし、魔力量は十分なのか？ 発現したばかりでは、まだ心もとないのでは」

「もし量が足りなければ——肉体ごと結界の糧にしてしまえばよい。この国を守るために身を捧げた聖女様、十分な誉れではございませんか」

会議には私も同席していた。ただ、彼らはまるで私がそこにいないかのよう
に、話し続けた。

彼らが発現したと思っている魔力がジークから来ているものだと、欠片も疑っていない様子で。聖女の力がついに花開いた、それだけが彼らにとっての事実の全てだった。そこに、私という人間は関係なくて——きつと彼らは私のことを結界を直すための駒だとしか見ていないんだろう。

（『肉体ごと』か……）

それはつまり、魔力が足りなければ、私はこの国を守るための生贄になるかもしれない、ということだ。

——それ自体は、仕方ないことなのかもしれないと思う。私の魔力が足りないのは事実だから。

元の世界に戻る肉体ももうないし、この世界でも元の世界でも、私には帰る場所がない——そんな私が誰かの役に立てるなら、それでもいいかもしれないと思う気持ちもある。

だけどその一方で、そんな人の生死に関わることを、当の本人を前にして、悪びれずに言ってしまう神経が私には信じられなかった。

「はあ……」

何度目かもわからないため息をつきながら、気がつくと、私は森の奥へと向かっていった。

どんな顔で会えばいいのかも、何を言えばいいのかも、まだなにもわからな
いままだった。それでも私の足は、通い慣れた道を一步一步進んでいく。

ひたすら草木の生い茂った踏み分け道を進み、息も上がってきた頃、ようや
く木立の奥に塔が見えてくる。

もはや見慣れてしまった、飾り気もない石造りの扉。いつも無愛想に閉まっ
ているその扉の前で、私は立ち止まった。

ノックしようとした手が、宙で止まる。

（ジークに会いたい。……でも会ってどうするんだろう。ジークは私のことな
んて、なんとも思っていないのに）

脳裏に、鮮やかな赤色の髪と、切れ長の琥珀色の瞳がくつきりと思い浮か
ぶ。またあの瞳で、私を見つめてほしい。——そう思う気持ちが胸の奥に火を
灯して、それにまた胸がきゅつと切なくなつた。

そんな気持ちを追いかうように、ふるふると首を振った。

「……でも、もうここまで来ちゃったし」

ため息をついて、扉に手を伸ばしたとき——ドアが内側から開いた。

「遅い。いつまで突っ立ってるつもりだ」

「……へっ!？」

驚きのあまり、変な声が口から漏れ出す。心臓が一気にバクバクと早鐘を打つ。

いつもは私が何度もノックして、数秒待って、それからやっと魔法で開けてくれるドアだ。わざわざ下まで降りてきて開けてくれたことなんて、一度だっけなかったのに。

ジークは薄い唇を不満そうにへの字に引き結んで、腕を腰に当てて立っていた。

「ど、どうして……」

「いいから、さっさと上がれ」

——なんか、全部吹っ飛んでしまった。

さつきまでのぐちゃぐちゃとした気持ち、すうつと消えていく。

ジークは億劫そうに螺旋階段を上り始めたけれど、私はいつまで経ってもそこから動けない。すると彼が振り返って、早く来いと言わんばかりの視線を向けてきた。

その視線に私はようやく、彼の後ろをついていくのだった。

部屋に入ると、インクと古い羊皮紙が混ざったような、ジーク特有の匂いが鼻腔をくすぐった。魔法薬の甘い香りが、その奥にかすかに溶けている。体温

が、ゆつくりと上がっていく。

（だめ……。思い出しちゃ、だめ）

ジークは部屋の奥へ真つ直ぐ進み、デスクの前の椅子に腰を下ろした。前回、私が彼の膝の上でいろんなことをされた、あの椅子だ。

そこに座っている彼をまともに見られなくて、そつと視線を机の上に逃がす。

広い天板の上には、くしゃくしゃに丸められた紙や、真ん中から破られた紙がいくつも散らばっていた。書きかけの魔法陣らしきものが見えたが——うまくいかなかった、ということだろうか。あの彼でもうまくいかないことがあるんだと思うと、なんだか不思議な心地がした。

「来ないのか？」

部屋の端で突っ立ったままの私に、当然のようにジークが言う。

（だって、これ以上近づいたら……）

同じ空間にいただけで、身体が熱くなる。心臓が早鐘を打つ。下腹部がきゅうッ♡ と疼いて、切なくてたまらなくなる。

「でも、私……」

「おいで」

強制するわけでも、命じるわけでもない。それなのに、有無を言わせない彼の声が脳に直接響くようだった。理屈より先に、身体の方が反応してしまう。

（ああ、だめ。だめなのに）

私の足が、私の意思に反して、彼に向かって動き出す。彼は、琥珀色の瞳を細めたまま、ただじっと、私を待っていた。

ふらふらと、でも確実に、彼の方へ引き寄せられていく。お互いが触れられる距離に近づいたとき、彼の手が私の手首をぐっと力強く引いた。

「あ……ッ」

体勢を崩して、彼の広い胸へと倒れ込む。気づけば膝の上に乗せられていた——前回と同じ、あの体勢で。彼の匂いが、肌ごと包み込むように鼻腔の奥まで広がった。

肩を掴まれて、ぐつと顔をあげさせられる。じつと見つめてくる彼のとりりと潤んだ琥珀色の瞳には、彼を求める女の顔をした自分が映っていた。

「ん……ッ♡」

唇同士が触れ合った。触れ合ったのは一瞬で、すぐに口付けは深く、お互いを貪り合うようなものへと変わっていく。

「ん、ちゅ……ッ♡　ぢゅる……ッ♡　は、あ……ッ♡　ん、ふッ♡」

彼と舌を絡め合わせる。お互いの高い体温が混ざり合って、触れたところから境界線がととろに溶けてなくなってしまうそうだった。

(キス……♡ 気持ちよすぎる……♡ あつつくて、溶かされる……♡)
 息が苦しくなっていくにつれて、頭がふわふわと浮き上がっていく。必死に
 酸素を求めながらも、だけど彼の唇をずっと味わっていたくて、どうしても離
 れることができない。

——だって、本当はずっとこうしたかった。

この数日間、彼を想っては一人で何度もオナニーを繰り返した。だけど、一
 人じゃちつとも満たされなくて。そんなやりきれない飢餓感が、今、彼と唇を重
 ね合わせることで甘く溶けていく。

「んむ……♡ チゅ♡ くちゅ、う……♡ ぢゅるる♡ ん、
 はあ……♡」

触れ合わせた唇から、熱いものがひっきりなしに流れ込んでくる。私はこの
 熱いものをもう知ってしまったている。ジークの魔力だ。

だけど、今回はその熱さが驚くほどすなりと身体に馴染んでいく。彼から注ぎ込まれるものを、私の肉体は最初から自分の一部だったかのように、自然と受け入れてしまっていた。

「——んんうッ♡」

不意に、背中の中のラインをすうっと彼の指先がなぞった。たったそれだけの微かな刺激なのに、今の私の身体は過敏に反応してしまい、びくんッ♡ と大きく身体をすくませてしまう。

「……はっ、背中を撫でただけなのに敏感だな。今からこの調子で大丈夫なのか？」

ジークは楽しそうに唇の端を歪めた。

それは、一体何に対する『大丈夫』なのだろうか。なんとなく分かっちゃいまいそうだったけれど、それを自覚するのは恥ずかしすぎて、考えるのをやめた。

——いや、正しくは彼のキスに浮かされて、他のことを考える余裕がなかったのだけだ。

背中を撫でるジークの指先から逃れるように、彼の胸元に身体を寄り掛からせると、今度は大きな両手がお尻に触れた。

「ひゃんッ♡」

「いい声で鳴くじゃないか。尻に触られるのも好きなのか？」

「ち、ちが……ッ♡ あ♡ ん、あ……ッ♡ ん……ッ♡」

スカートの布地越しに、お尻の丸みを確かめるように、指先で円を描くようにさわ……ッ♡ さわ……ッ♡ と優しく撫でられる。

焦ったような、ほんのわずかな刺激。だからこそ、かえってそこにすべての意識が集中してしまい、ぞわぞわとした快感が全身を駆け巡っていく。

「ん……ッ♡ あ、う……ッ♡ ん♡♡」

ゾクゾクする感覚に耐えかねて、思わずお尻のあたりにきゅッ♡と力が入ってしまう。すると、それに連動するように、お股の方からくちゅ……ッ♡といやらしい水音が響いてしまった。

（わ、わたし……♡ もうこんなに濡れて……♡）

「もうぐつしよぐしよだな。ずっとこうして欲しかったんだろう」

「そ、そんなこと……ッ♡ ……あ♡」

ジークが私のお尻の肉を鷲掴みにして、ゆつくりと開いたり閉じたりする。その動きに合わせて、おまんこもせわしくなく形を変え、にちゅ……ッ♡にちゅ……ッ♡ とさつきよりも大きな水音が響く。

「あッ♡ おと、お……ッ♡ やだあ……♡」

「そう言いながら、ぐしよぐしよにしてるのはお前だろ」

そんな意地悪なことを言いながらも、こめかみにちゅ、と優しいキスが落ち

てくる。

ジークの手が今度はブラウスの裾から滑り込んできて、そのまま下着ごと一気に胸の上までたくし上げられる。

「あ……ッ♡」

遮るものがなくなり、彼の目の前にぶるん♡♡ と豊かな乳房がこぼれ落ちた。

胸が大きいのは昔からコンプレックスで、それを目的に男性から声をかけられることも多かった。だから、普段はなるべく胸が目立たないような服を好んでいた。

「でッか……」

呆気にとられたような、素直に感心するような低い声。男らしい視線にじつと見つめられて、羞恥で顔が一気に熱くなる。

咄嗟に隠そうとした両手は、彼に簡単に捕まって後ろ手で一纏めにされてしまった。さらに彼におっぱいを突き出す格好になってしまい、耳までかっとなくなる。ジークのじつとりとした熱い視線に晒されて、すでに尖りきった先端がぴく……ッ♡ と震えた。

今まで男性から性的な視線を注がれるのは苦手だったはずなのに、ジークに見つめられるのは、恥ずかしくてたまらないのに少しも嫌じゃない。それどころか、もっと彼のその熱い手で触れてほしいとさえ願ってしまっている自分だった。

ジークの喉仏がごくり、と上下する。

はあ……ッ♡ と熱い吐息が乳房に触れた次の瞬間には、乳首がすっぽりと彼の温かい口内に吸い込まれていた。

「ああ……ッ♡」

ジークの舌が、勃ち上がった乳首をピンッ♡ピンッ♡と口の中で弾く。その痺れるような刺激が背骨を駆け抜け、びくッ♡びくッ♡と腰が震えた。

「あッ♡　じーく、う♡　それッ♡　ああ……ッ♡」

「ぢゆる……ッ。……ん？　ああ、反対の乳首も触ってやらないと切ないよな」

「え、あ♡　ひゃ……ッ、んん……ッ！♡」

気持ちよすぎる、と伝えただけだったのに、どうやら反対も触ってほしいというおねだりに聞こえてしまったらしい。

私が否定するより先に、ジークの左手が空いていた右胸に伸びる。下から持ち上げるようにふに……ッ♡　ふに……ッ♡　と柔らかな膨らみを揉みしだいたかと思うと、中心のピンク色の突起を親指と人差し指で強く摘み上げた。

「ああッ♡♡」

吸われている右胸よりもより明確に、ビリリッ♡ と電流が走って、下腹部を甘く痺れさせる。

（乳首吸いながら……ッ♡ 反対もコリコリするのだめ……ッ♡ 両方きもちよくて、へんになる……♡）

ぢゅるるるッ♡ ピンピンッ♡ くりくり……ッ♡ くりくり……ッ♡

「あゝッ♡ ビーく、う♡ あッ♡ りようほう、やだあッ♡ んんッ♡」

「ぢゅる……ッ。は、すごいな。腰、気持ちよさそうにずつと揺れてる。このまま続けるぞ」

「や……ッ!?♡ あう、なんかッ、きぢやうう……ッ♡」

下腹部が熱く疼いて、まだ触られていない膣の奥がぎゅううッ♡ と締まる。口内で転がされていた乳首の根本をカリィ……ッ♡ と優しく甘噛みされると、もうダメだった。

「だ、んん……ッ♡——~~~~ッ♡♡♡」

ジークの頭を掻き抱くようにしてしがみつinaながら、全身を激しく痙攣させた。何度か身体をびくん♡と跳ね上げさせたあと、ゆつくりと身体が弛緩していく。

「はッ、あ……ッ♡」

（イっちゃった……♡ 胸だけで……、こんなの、初めて……♡）

ぐったりと脱力する私の身体を抱きすくめたまま、ジークが不意に立ち上がった。何をするのかと思う間もなく、私は目の前の机の上に座らされた。

「……？♡ じーく……？♡ ん……ッ♡」

唇に触れるだけの優しいキスが落とされると、すぐにジークの手が私の服へと伸びた。達したばかりの熱に浮かされて頭がまともに働かない私は、それを恥

ずかしいと思うような余裕もなく、ただ彼のされるがままになっていた。

胸までたくし上がったままだったブラウスが、容赦なく脱ぎ捨てられる。続いてスカートへと伸びた彼の手は、下着ごとまとめて、私の足元へと一気に引き下ろしていった。

（ああ……♡ 見られちゃう……♡）

肌から離れていくパンツに銀色の糸が引いて、ぷつり♡ と切れる。ひんやりとした外気に晒されたおまんこが、切なそうにきゅうん♡ と疼いて愛液を滴らせた。

ジークは私の膝をぐいつと割り開くと、とろりと濁った熱っぽい視線を私の秘部へと向けた。

「や、やだぁ……♡ みないで……♡」

「それは聞けないな。綺麗だから、もつと見たい」

「う……♡」

（そんなとこ、綺麗なわけないのに……♡）

それでも彼は、熱い視線を私のおまんこに注ぎながら、興奮を堪えるように重く、熱い息を吐き出した。

彼の目の前に、いやらしく蜜を滴らせたソコを晒してしまっている。好きな人に、そんな浅ましい姿を見せてしまっているのが、たまらなく恥ずかしかった。

だけど、そんな私の意思に反するように、おまんこは彼の熱い視線を悦ぶようにきゅん♡ きゅん♡ と疼いてはしきりに蜜を吐き出し続ける。

「だいぶ俺の魔力が身体に馴染んできたんじゃないか？ 今なら、もう少し注いでも平気だろう」

「あ……」

魔力を、注ぐ——。

その言葉を聞いた瞬間、胸の奥がほんの少しだけ冷えていく。彼に会いたいと思つたのは私だ。会つてしまえば、こうなることもわかつていた。だけど、彼の目的は最初から私が魔法を使えるようになるための魔力を注ぐことであつて、この甘い愛撫は魔力を身体に馴染ませるただの手段に過ぎない。

（それでも……、私は……）

この熱く疼く身体は、もう彼にしち鎮められない。でもそれは、体内にわだかまる彼の魔力のせいだけではなくて。それ以上に——ただ、好きな人に、ジークに、触れてほしかった。

だから、私のことを愛していかないならやめて、なんていうつもりもない。ただ、ただ。ほんの少し、悲しいだけで——。

——ぢゅううううッ♡♡

「お!?♡ お、お……ッ♡♡」

切ない感傷に沈みかけていた心が、容赦なく押し寄せた強烈な快楽によって無理やりに引き戻された。ジークが私のクリトリスに吸い付いて、ソコを思いつき吸い上げたのだ。

脳を灼くような強烈な快感に、脳裏で激しく火花が散る。お腹の奥がかつと熱くなって、さらさらとした液体がぷし……ッ♡と溢れ出して、机の上に零れ落ちていった。

何が起きたのか碌に理解もできないまま、ただ身体を震わせる私を、ジークはクリトリスに吸い付いたまま、欲情に濡れた熱い視線でじつと見つめていた。

「クリトリス吸われただけで甘イキしたのか。俺のちんぽを突っ込んだら、一体どれだけイキまくるんだろうな？」

「あッ!?♡ うう……ッ♡」

『ちんぽ』という何も隠さない言葉をぶつけられた瞬間、どくんッ♡ と身体が熱くなって、おまんこの奥がぎゅうッ♡ ぎゅうッ♡ としきりにうねり出す。

（そんなこと……ッ♡ 言われたら……♡）

——どうしたって想像してしまう。あのとき背中越しで感じた硬さ。そして、今も彼のズボンを押し上げている猛々しい屹立が、私のナカをぐっぽり♡ と隙間なく埋めていくところを。

キスや愛撫だけでもこんなにいっぱいいっぱい頭がおかしくなりそうなのに、その先の快楽なんて、どうなってしまうんだろうか。

「あ♡」

ぢゅッ♡ と再び彼の唇がクリトリスを吸い上げて、ビクビクッ♡ と身体

が跳ねた。

「想像しただけでいきそうになってるのか？ まだ挿れてやらないぞ」

「ぐうぐう……ッ♡」

もう、お腹の奥が切なくて切なくて、どうにかなりそうだった。今すぐにこのナカを、彼の熱いもので埋めてほしい――。体内を駆け巡る彼の魔力が、身体の芯まで熱く溶かしていく。これが魔力を馴染ませる手段だなんて、もうどうでもよくなってしまう。ジークが好きだから、彼に抱いてほしくてたまらない。

ジークの両手が、再び胸へと伸びる。ぷっくり♡ と勃起上がったままの乳首を爪先でカリ……ッ♡ と引つ搔かれた。

「あ、ア……ッ♡♡」

カリカリ……ッ♡ カリカリ……ッ♡ ぢゅるるるッ♡ ぢゅううッ♡

ぢゅるッ♡

（これ……ッ♡ 胸もクリトリスも刺激されて……ッ♡ りようほうきもちい
い……ッ♡ お腹の奥ッ♡ ぎゅううッ♡ って熱くなるうッ♡）

お腹の奥は彼の男根を求めて切なく疼いているのに、上と下から与えられる
快楽に、私の身体はもう耐えきれなくなっていた。意識とは無関係に、膝がガ
クガクッ♡ と激しく震え出す。

「あ♡ イクッ♡ また、イク、ウ……ッ♡ あッ♡ そんな吸わないで、……
おッ♡ くるッ、くるッ♡ アクメくる、ううう……ッ♡♡」

ビクビクビクッ♡♡ ふしゃあああッ♡♡

ピュッ♡ ぴゅ……ッ♡♡

一段と深いアクメの波が押し寄せてきて、私は机の上で大きく身体をのけぞ
らせた。

おまんこから勢いよく何かが吹き出して、机や秘部に顔を埋めるジークにか

かつてしまう。頭が真っ白になって、何も考えられない。

「ああ……ッ♡ は、あ……ッ♡ んう……ッ♡」

荒い息をつきながら、必死に呼吸を落ち着かせていく。

（ああ……♡ ジークにお潮全部かけちゃった……♡ 申し訳ないのに——）

ジークがたっぷりの水を被った前髪を雑に掻き上げた。その姿がなんだか色っぽくて、目が離せない。

おまんこがもう、沸騰しそうなくらい熱かった。彼の魔力が全身を駆け巡って、達したはずなのにちっとも興奮が収まらない。頭の中が、彼を求める欲望だけでいっぱいになる。

ジークがゆっくりと身体を起こして、私を見つめた。いつもは不遜な琥珀色の瞳が、今は獲物を狙う獣のような、獰猛な情欲の熱を孕んでいる。

お互いの濡れた視線が絡み合う。

「……じーくッ♡ わたし、もう……♡」

恥もかなぐり捨てて、気づいたときには声をあげていた。身体があまりにも切なくて、目頭が熱くなり視界が潤む。

そんな私に、ジークがごくり、と喉を鳴らして生唾を飲み込んだ。大きく息を吐き出してから、彼は言った。

「俺のはでかいから、もつとちゃんと慣らしてからの方がいいと思うぞ」

そう言われて、彼のズボンの布地を強く押し上げている屹立の方に、目を向けてしまう。ズボン越しでも、その布を押し上げている力強さに、彼のモノがどれほど大きいのかは容易に想像できてしまった。その圧倒的な質量を想像しただけで、お股の奥がまたきゆうん♡♡ と熱く疼き出す。

「で、でも……ッ♡♡ その……、たくさん、濡れてるから……。だい、じょうぶ……♡♡」

最後の方はだいぶ尻すぼみになってしまった。自分から男性にセックスをねだるなんて、普段の私なら絶対にありえない。どうかしているとは思えなかった。

だけど、身体を支配する彼の濃厚な魔力と、なによりジークのことが愛おしくてたまらないという純粋な恋心が混ざり合い、私の理性は綺麗に溶かし尽くされていた。もう、自分を止められなかった。

「——それなら」

ジークの瞳が、意地悪そうに細められる。

「ちゃんと自分から見せて、俺にねだってみせるんだな。私のおまんここんなにごちやぐちやだから、ジークのおちんぽ、挿れてほしいんです、ってな」